

〈研究成果の紹介〉

## 酒造好適米「神の穂」の奨励品種採用と多収・高品質栽培法

農業研究所 伊賀農業研究室

### 1. 成果の内容

以前から県内酒造業者からは、地元産材料にこだわった商品開発のための吟醸酒や純米酒向け酒造好適米の生産を強く要望されていました。そこで、三重県で育成した酒造好適米品種「神の穂（旧系統名 三重酒18号）」を奨励品種に採用するとともに、現地への円滑な普及を図るための栽培法を明らかにしました。

#### (1) 品種の特長

「神の穂」は出穂期、成熟期ともに「コシヒカリ」とほぼ同じの早生品種です。稈長は80cm程度で、「コシヒカリ」より10cm程度短く、穂長は「コシヒカリ」よりやや長いです。穂数は「コシヒカリ」より少なく、草型は穂重型です。「コシヒカリ」に比べ倒伏の発生は軽微で、耐倒伏性に優れます。収量性は「コシヒカリ」と同程度です。

心白発現率は同じ酒造好適米である「五百万石」より少ないですが、玄米の外観品質は透明感があり良好です。また千粒重は「五百万石」とほぼ同程度で、粗蛋白含有率は「五百万石」より低くなっています。

#### (2) 移植適期(表1)

移植適期は4月下旬から5月上旬で、60kg/a程度の収量が確保でき、また外観品質も良好です。移植時期が遅くなると粗蛋白含有率は低くなりますが、穂数が減少することにより収量が低下して、外観品質も低下します。また5月下旬移植では倒伏が発生します。

#### (3) 適施肥量(表2)

高品質で多収な生産物を得るための適基肥窒素量は0.5kg/a程度です。基肥0.2kg/aでは、大粒で粗蛋白含有率は低くなりますが、低収となり玄米品質も低下します。また基肥0.8kg/aでは、多収で玄米品質も良好となりますが、倒伏が発生し、粗蛋白含有率も高くなります。

### 2. 技術の適用効果と適用範囲

栽培予定地域は県内全域で、普及見込み面積は約80haです。

### 3. 普及・利用上の問題点

この栽培法は伊賀地域で行った試験結果に基づいています。今後、伊勢平野における栽培法についても検討していく予定です。

(現作物研究課 山川 智大)

表1 異なる移植時期における「神の穂」の生育、収量、品質(2006年、2007年の平均値)

作期	稈長 (cm)	倒伏	穂数 (m <sup>2</sup> /本)	精玄米重 (kg/a)	玄米千粒重 (g)	外観品質	粗蛋白含有率 (%)
4/下	77	0	369	60.1	26.3	3.3	7.5
5/上	77	0	342	60.1	26.3	4.0	7.6
5/中	79	0	336	55.7	26.4	4.8	7.2
5/下	79	1.6	308	53.4	26.3	4.8	7.0

表2 異なる基肥窒素量における「神の穂」の生育、収量、品質(2006、2007年の平均)

基肥窒素量 (kg/a)	稈長 (cm)	倒伏程度	穂数 (本/m <sup>2</sup> )	収量 (kg/a)	千粒重 (g)	m <sup>2</sup> 籾数 (×100)	1穂籾数	粗蛋白含有率 (%)	玄米品質
0.2	77	0	299	54.9	27.0	231	77.2	7.0	4.8
0.5	80	0	330	60.4	26.6	259	78.6	7.3	4.3
0.8	84	1.3	371	64.8	26.2	284	76.5	7.4	4.3

移植期 5/11(2006)、5/7(2007)、穂肥は出穂20日前に窒素成分で0.3kg/a施用。倒伏 0(△)~5(甚)、精玄米重、千粒重は水分15%換算値、粗蛋白含有率は乾物値、外観品質は1(上上)~9(下下)。

試験地: 伊賀農業研究室(伊賀市)、作期 4/下: 4/27,28、5/上: 5/7~9、5/中: 5/16,17、5/下: 5/26~28、施肥窒素量(kg/a) 基肥 0.4、穂肥0.3(出穂20日前)、倒伏 0(△)~5(甚)、外観品質は1(上上)~9(下下)。